

Asian Cultural Dialogues (ACD) ・ アジア文化対話 :

アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性

共同主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

沖縄大学地域研究所

2025年9月13日 (土) 9:30~17:30

言語：日本語・英語 (同時通訳)

会場：沖縄大学 3号館101教室

趣 旨

沖縄はアジア太平洋戦争時に住民の4人に1人が死亡したとされる激しい地上戦を経験している。さらに戦後も日本国内の70%を超える米軍の施設が集中する「基地の島」と化した。女性や子どもを含む非戦闘員が犠牲となった「戦場」の暴力は、現在進行形のグローバルな課題を再考察する上で欠かすことができない題材である。軍事的な対立の際に、私たちはどのように非戦闘員の命を守るための観点を保ちうるだろうか。ジェンダーからの問いが必要な理由がそこにある。

沖縄で開催されるAsian Cultural Dialogues (ACD；アジア文化対話) フォーラムでは、地上戦を経験し、今なお米軍基地による性暴力事件が絶えない沖縄で、ジェンダーという弱者への配慮を前提とする視点から「過去・現在・未来」につなげる普遍的価値を探る。

強調したいのは、ACDは開催地の「学び、感じ、行動する」アクティブな議論の場でありながらも、その地域では見逃している国境を越えた視点や、洞察を開催地に提供する場でもある点である。「アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性」は、軍事的な面に限らない。日常における構造的な暴力を紐解いてこそ、より普遍的な議論になりうる。

沖縄と同じく米軍とフィリピンゲリラとの間で激しい地上戦が行われたミンダナオ地域に注目しながらも、その中でより目に見えない「ジェンダー」の問題に焦点を当てたり、香港でアートを通してジェンダーと暴力の関係性を考えるキュレーターの話の聞いたり、ACDが持つ多国籍ネットワークを用いた活動家や文化人の観点も提示する。

本フォーラムは「沖縄の問題」を論じるものではない。多国籍の専門家により構成され、その議論の焦点は沖縄という空間で出会う「アジア的視点」と言える。2025年度は戦後80周年という節目の年であり、いかにアジア太平洋戦争時の傷痕に向き合うかをアジア各地で議論する年でもある。議論の場である沖縄はもちろん、アジアの過去、現在、未来に一貫して忘れてはならない本質的な価値とは何かを国際的かつ学際的に、さらにはアカデミアを超えて皆で考える機会になることを望んでいる。

参加にあたってのお知らせ

参加には事前登録が必要です。

QRコードまたはURLからお申込みください。

事前登録URL: <https://forms.gle/zGLtXuYR9WWVkfur7>



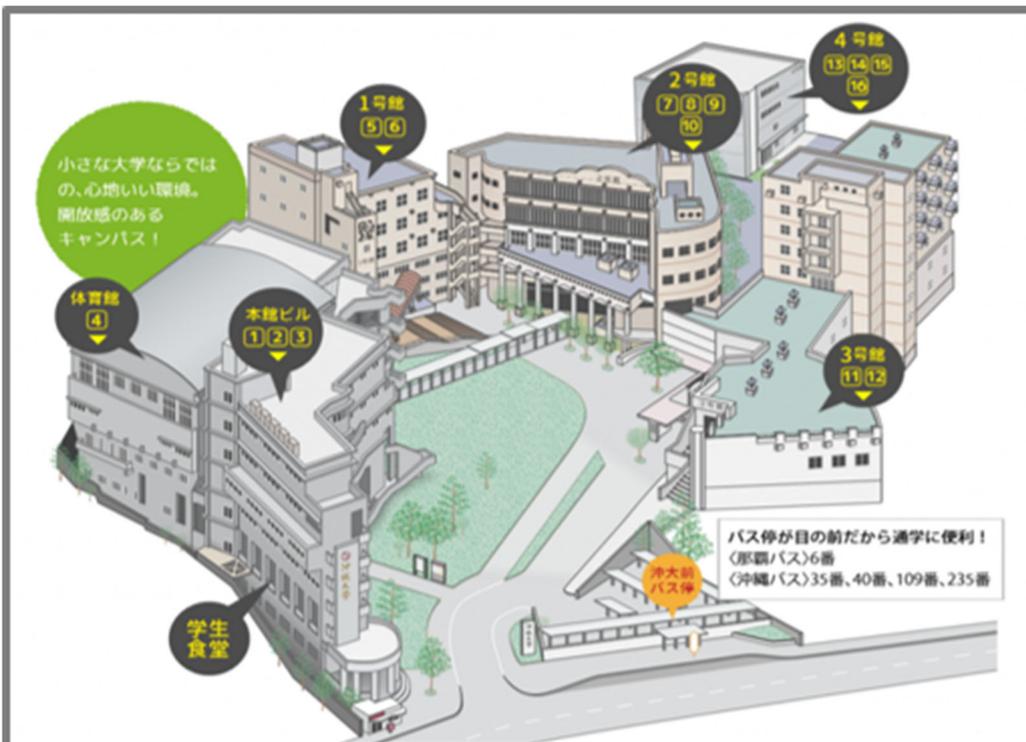
【会場】

沖縄大学 3号館101教室

大学へのアクセス: <https://www.okinawa-u.ac.jp/campuslife/facility/access/>



キャンパスマップ



【お問い合わせ】 SGRA 事務局: sgra@aisf.or.jp

プログラム

会場：沖縄大学 3号館101教室 および Zoom

9:30	イベント開始 ご挨拶 今西淳子 (SGRA)、山代 寛 (沖縄大学学長) フォーラムの紹介 洪 玗伸 (沖縄大学) セッション① 基調講演 司会：デール ソンヤ (SGRA)、モデレーター：洪 玗伸 基調講演：富山一郎 (同志社大学) 「暴力に抗する「他者」の眼差し」 45分 (日本語) コメンテーター：宮城晴美 (沖縄女性史研究家)、ロバート・リケット (和光大学元教授)、グオ・リフ (筑波大学)
11:00	休憩
11:30	セッション② 交差性・各発表：30分 司会：イドジーエヴァ・ジアーナ (東京外国語大学) 発表1 高里鈴代 (「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表) (日本語) 発表2 Intan Paramaditha (マッコリー大学)、「インドネシアのフェミニズム運動」 (英語) コメンテーター：Nyi Nyi Khaw (ブリストル大学)、梁絃娥 (ソウル大学)
13:00	昼食
14:00	セッション③ 戦争とジェンダー・各発表：30分 司会：リオ・アロン (シアトル美術館) 発表1 山城紀子 (沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト) (日本語) 発表2 Jose Jowel Canuday (アテネオ大学) 「平和の最後の数マイル：ミンダナオ島バンサモロ地域のジェンダー化された最前線における長期戦争の後に何が起こるのか」 (英語) コメンテーター：福永 玄弥 (東京大学)、増渕あさ子 (立命館大学)
15:30	休憩
16:00	セッション④ これからに向かって・各発表：20分 司会：洪 玗伸、デール ソンヤ 発表1 徳田彩 (沖縄キリスト教学院大学在学学生)、松田明 (沖縄キリスト教学院大学卒業生) 「沖縄の基地暴力とジェンダー：CSW国連女性の地位委員会に性暴力を訴えるー沖縄県内の動きを中心にー」 (日本語) 発表2 Memee Nitchakarn (タイの学生活動家) 「タイの若いフェミニスト運動の流れ」 (英語) 発表3 中塚静樹 (沖縄大学在学学生) 「沖縄戦の記憶を聴く若者たち：証言者との交流で学ぶ記憶の継承」 (日本語) コメンテーター：親川裕子 (沖縄大学・Be the Change Okinawa代表)、上野さやか (沖縄大学・エンパワメント・ラボ・おきなわ共同代表)、Bonni Rambatan (Rainbow Panda代表)
17:30	フォーラム閉会 懇親会

「暴力に抗する「他者」の眼差し」 発表者：富山一郎（同志社大学）（日本語）

継続する戦争を他人事のように語り、すでに刻印された暴力の痕跡をなかったことのように放置し続けることにより存立する世界が今だとしたら、暴力に抗することは、このどうしようもない今の秩序への内省的な問いとともに、なされなければならない。そしてその問われるべき秩序の根幹には、法や制度だけではなく、言語的な秩序がある。かかる言語的秩序が暴力を容認し追認しそして否認しつづける日常を構成しているともいえるだろう。だからこそ内省的な問いとは、語っても語ったことにされない声や、言葉を持たない傷に出会うことでもあるのだ。傷はどのような関係性において言語化できるのか。それは、いかなる言葉で平和を描くのかという、言葉自体への問いでもあるだろう。アジアという場に刻印されつづけてきた暴力の傷痕に向き合うとは、こうした声や傷との出会いを丁寧に再編集し、暴力を容認し追認し否認してきた今の世界が、そこかしこで別の社会性への予感を抱え込んでいくプロセスなのではないだろうか。そのようなプロセスを担う、場や言葉について考えたい。

富山一郎

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。著書に、『近代日本と「沖縄人」』（日本経済評論社、1990年）、『戦場の記憶』（日本経済評論社、1995年）、同増補版（2006年）、『暴力の予感』（岩波書店、2002年）、『流着の思想』（インパクト出版会、2013年）、『始まりの知』（法政大学出版局、2018年）、がある。編著に、『記憶が語り始める』（東京大学出版会、2006年）、『ポスト・ユートピアの人類学』石塚道子、田沼幸子と共編（人文書院、2008年）、『現代沖縄の歴史経験』森宣雄と共編（青弓社、2010年）、『コンフリクトから問う』田沼幸子と共編（大阪大学出版会、2011年）、『あま世へ』森宣雄・戸邊秀明と共編（法政大学出版局、2017年）、『軍事的暴力を問う』鄭柚鎮と共編（青弓社、2018年）、などがある。最近考えていることは、思索という行為が集団を構成するなら、いかに思索し、いかなる集団を作り上げていくのかということが、学知においてもっと問われるべきことなのではないか、それが思想という問題なのではないか、ということです。